

ちょっとアレな実習生の ちょっとアレなブックリスト(家庭科教育編)

ver 1.0.0



家庭科教育学の分野

学習領域による分類

中学校・高等学校における指導領域の分類に近い。食生活・衣生活・住生活教育、保育教育、調理教育、など。

領域横断的なもの

消費者教育・市民性教育・健康教育なども近年発展しつつある。

教科教育に共通する分類

家庭科教育史、家庭科教育原論、カリキュラム論、評価、ほか。

隣接分野との関連

家政学と家庭科には密接な関連がある。また、ジェンダー論、女子教育史、服飾文化史、あるいは家族社会学などからのアプローチも少ないながらみられる。

ブックリスト (家庭科教育編)

このブックリストは、家庭科教育に興味のある筆者が、独断と偏見に基づいて選書したものです。不勉強ゆえの不備があると思いますので、暇を見て改訂していきたいと思います。

家庭科という教科は、戦前の家事科や裁縫科にそのルーツがありますが、戦前と戦後の理念の断絶、初等教育と中等教育の乖離、性別カリキュラム、および職業教育の軽視など幾多の苦難にさらされ、ことあるごとに新たな教科理論の編成が要請されてきたという歴史を持ちます。

奇しくもこの2014年は中等教育において家庭科の男女必修修になって20周年の節目にあたり、このような年に家庭科教育について学ぶことは意義深いものと筆者は考えます。

前置きが長くなりましたが、

1. 入門書
2. 概説書
3. 実践寄りのもの
4. 家庭科教育史の本
5. 家政学に関するもの

の順に家庭科教育に関する文献を紹介していきます。なお、各学習領域(左コラム参照)に特化したものは、煩雑を避けるため省きました。

1. 入門書

まずは、岩波ジュニア新書の「正しいパンツのたたみ方——新しい家庭科勉強法」(南野忠晴, 2011)は外せないでしょう。自己開発・対話的理性の観点から家庭科の必要性を説きます。やや切り口が偏狭な印象があるのが難点ですが、生徒へ薦めるのもあり、活写される高校家庭科の授業を参考にするのもあり、の良書です。

教員養成課程の教科書からは、「家庭科教育を学ぶ人のために」(堀内かおる, 2013)。程よい分量で最新の話題も含んでいます。

2. 概説書

「家庭科教育」と書名にある本は大抵、概説書に含まれます。例えば、「現代家庭科教育法—個人・家族・地域社会のウェルビーイング向上をめざして」(エリザベス・J. ヒッチ, ジューン・ピアス ユアット, 中間美砂子訳, 2005)はアメリカンな授業デザイン・カリキュラム開発の視点が学べます(ただし出来れば原著で読むことを薦めます。)類書として「Creative Instructional Method for Family & Consumer Sciences, Nutrition & Wellness」(Valerie M. Chamberlain, Merrilyn N. Cummings, 2003)など。



What is Home Economics?

The answers fall into two categories—these are the “I can’t define but I know it when I see it” type and the “all things to all men” type.

Roderick Bennett

「生活をつくる家庭科」(全3巻, 日本家庭科教育学会, 2007)は近年重視されつつある各分野の話題が、多くの研究者の手により解説されています。

教職課程のテキストとして出版されているものも多くあります。以下に列挙します：

「パワーアップ!家庭科一学び、つながり、発信する」(荒井紀子他, 2012)

「小学校家庭科授業研究」(池崎喜美恵, 2009)

「初等家庭科教育法—新しい家庭科の授業をつくる」(加地芳子, 大塚眞理子, 2009)

「教育実践力をつける家庭科教育法」(多々納道子, 福田公子, 2011)

3. 実践寄りのもの

最も多くの書籍が出版されているジャンルです。特に小学校の家庭科は、5・6学年でしか指導がされず、さらに実技・実習を多く行うため教員の抵抗感があるためです。

初心者向けの丁寧なものとして「新任教師のしごと 家庭科授業の基礎基本」(野崎恵津子, 稲田百合, 2010)があります(ただし対象は小学校)。その他にも多くありますが、代表的なものとして「生活を見

つめる 家族・家庭生活(家庭科の本質がわかる授業)」シリーズ(2010)や、実習に特化した指南書として「新図解家庭科の実験・観察・実習指導集」(日下部信幸他, 2008)が挙げられます。

「家庭科教育事典」(日本家庭科教育学会, 1992)は学習事項や用語と、各分野や教育学の専門書の橋渡しとなる網羅的なものです。

4. 家庭科教育史の本

残念ながら通史的な書籍が近年のものに限るとほとんど見当たらないのですが、その中でも、高名な家庭科教育史家である常見育男の「家庭科教育史増補版」(1972)は各所で引用されています。また、「家庭科教育50年—新たな軌跡に向けて」(日本家庭科教育学会, 2000)は政策や教科書の変遷に偏らず、様々な情報がコンパクトにまとまっています。

実践に関しては、「戦後家庭科教育実践研究」(田結庄順子, 1996)や「資料からみる戦後家庭科の歩み—これからの家庭科を考えるために—」(朴木佳緒留, 鈴木敏子, 1990)など1980年代から1990年代に活躍した研究者の著作が参考になります。

技術科教育の視点からのものとしては、「昭和技術教育史」(清原道寿, 1998)、さらに戦前の家事科・裁縫科の教育政策については「日本近代学校教育史における「家事」教育成立史研究」(野田満智子, 1999)に詳述されています。

5. 家政学に関するもの

最後に家政学書の出番です。「今こそ家政学—くらしを創る11のヒント」(『家政学のじかん』編集委員会, 2012)は家政学のディシプリンを提示しながら、それぞれのトピックについても丁寧な紹介がされています。家庭科教育にも言及しています。

家政学の歴史読み物としては、「家政学の間違い」(ローラ・シャピロ, 種田幸子訳, 1991)とその批判に答える「家政学再考—アメリカ合衆国における女性と専門職の歴史」(S.ステイジ, V.B.ヴィンセンティ, 倉元綾子訳, 2002)があります。

最後に、日米の家庭科教育に大きな影響を与えた、マージョリー・イーストによる「家政学 現在・過去・未来」(村上淑子訳, 1991)を紹介します。彼女の「行為体系としての家族」の「実践的意思決定」に重きを置いた家庭科教育理論は今なお多くの研究者・実践者に支持されています。